

# 篝火の女

吉川英治

青空文庫



## 朱い横笛

箱根山脈の駒や足高あしたかや乙女には、まだ雪の襷ひだが白く走つていた。そこから研とぎ風おろされて来る風は春とも思えない針の冷たさを含んでいる。然し、伊豆の海の暖潮を抱いている山陰かげや、侍小路の土塀のうえには、柑橘かんきつの実が真はるなつ黄いろに熟うれていて、やはりここは赤城や榛名はるなの吹きおろしに曝さらされている上州平野よりは、遙かに氣候にめぐまれているなど、石田大七だいしちは何事につけてもすぐ自分の国土と比較して考えずにいられないのであった。

畑をみれば、まだ、上州あたりでは冬草も除れてないのに、この相州では、麦が三寸も伸びている。土民の家をのぞいても豊らしく見えるし、往来人の風采ふうさいをながめても文化の差がわかる程。ここは、上州よりもずっと都会色が濃いのであった。

『さすがに、北条早雲以来三代を経た関東一の覇府はふだ——』  
石田大七は、感心したが、すぐその後から、

『——然し、兵にかけては、北条が強いのではなく、ただ、この天産と地の理が強いだけなのだ』

と、肚はらのそこで、見くびってしまう。

酒匂川さかわがわを越えると、並木の風にも、北条氏三代のきびしい秩序が、颯々さっさつと、威厳をもって、旅人を襲ってくる。

この小田原の城下は今や、八州はおろか、海道随一の大都会だ  
 った。海には、唐船からふねが帆はばしらを並ならべ、街には、舶載物はくさいものを売  
 る店舗みせや、武具をひさぐ商人あきんどが軒のきをならべ、裏町には、京きやうや堺さかい  
 から移住して来た工匠たくみたちが、糸いとを染よめ、鍔やじりを鍛たえ、陶器すえものを焼  
 き、殷賑な煙けむりがなびなびいていた。

『文化は進んでいるが、そのかわりに、人間は甘いぞ』

と、石田大七は、すたすたと、城下へ向つて足を早めながら、  
 愈い、北条を見くびくつた。

酒匂の木戸は、往来人の検あらために厳密をきわめていたが、誰あつ  
 て、彼を敵国の乱波者らっぱもの（問者）と見やぶる者はなかつた。

だが、その彼の姿を見ると、町の洩はなたらしや、しらくも頭あたまや、

悪童たちが、

『やあい、ぼんやり飴屋あめや』

『おし  
唾か』

『唄を忘れたのか』

『胸の人形が欠伸あくびしているぞ』

と、ぞろぞろ尾ついて来て、擲からか揄かった。

大七は、ぎよつとした。

ここが北条氏康、氏政の本拠かと、事々物々に思わず眼を奪われて、うっかり歩いていたのであるが、気がついてみると、自分の姿は、阿波人形あわを飴箱あめの上に乗せ、それを首に掛けている飴あめ売うなのだ。その飴売が無口になって、眼ばかり光らせて歩いて

いては、なる程、唾と思われよう。

『子どもは、怖い』

と、眩つぶやきながら、大七は、朱あかい横笛を持って、城下の辻で、ひやらひやらと吹き初めた。

『さあ、お出でお出で。飴を買う子には、阿波人形の上方踊りを見せよう。買わない子には、見せぬとは云わぬが、遠慮して、後のほううしろに立っておくれ。——さあ、初めは槍舞じゃ、槍舞じゃ』

## 顔二つ

『萩乃はぎのや。——来てごらん』

『なんですか、姫ひいさま』

萩乃は、八雲によばれて、侍女こしもと部屋から縫物を置いて立った。

紅い糸屑がその裾についてゆく。

錦小路にしきこうじの邸やしきだった。千貫以上の禄取りが住む古い武家構えの

窓先なのである。裏も表も、いつも門扉はかたく閉まったままで

人の住んでいる気配もない家なのであるが、めずらしく、こうい

う声がして、巖がんじょう 豊ちような手斧なげず削りの窓格子に、美しい顔が二つ

並んだ。

二十歳はたちか、二十一、二ぐらいな、一方の気品のある明眸めいぼうの麗



人は、おとしの秋、武州野火止のびどめの合戦で、甲州勢のなかへ駈け入って戦死した東郷五郎左衛門直広のわすれがたみ——母もなく今はただ独りでこの広い屋敷に取り残されている八雲やくもなのである。萩乃は、彼女の小間使であり、忠僕であり、又、片刻かたとときもそばを離れないただ一人の護衛さむらいの士でもあつた。——と云つても勿論、萩乃は女性なのである。そして、年ばえもそう大しては違わない、一つか二つほど上であろう。色が白くて、笑靨えくぼが深かった、笑うと、すこし齧むしの蝕くっている糸切歯やえぼが唇からこぼれて見える。『姫ひめさま。めずらしく、外をごらん遊ばして、何がお心にとまりましたか』

『おまえには、聞えない?』

『なんですか』

『あの笛の音が——』

『飴売でございましたよ』

『ちがう』

八雲は、首を振った。

萩乃は、黒い糸切歯を、ちらと笑<sup>え</sup>んだ唇<sup>くちもと</sup>元<sup>もと</sup>から見せて、

『——では何の笛と仰<sup>おほ</sup>つしやいますか』

『あれを、ただの笛と聴くのは、おまえの耳がどうかしていますよ。あれは、杜<sup>とけん</sup>鶉<sup>かん</sup>管<sup>かん</sup>です』

『えっ』

萩乃は、耳<sup>そ</sup>を<sup>ば</sup><sup>だ</sup>敬<sup>た</sup>てながら、

『どうして、それがお分りになりますか』

『いちどでも、自分が、この唇を歌口に当てたことのある笛の音を、何で忘れてよいものか。しかも世間に幾つとは無い名笛でもあるし……』

『そういえば、ただ子ども寄せに吹いているようでも、どこか、余韻がちがうような気がしますね』

『私の耳に、間違いはない』

自信をこめて、八雲は云った。

その杜鵑管という笛は、先おとしの事、まだ彼女の父が壮健で、近国の乱も小康を得ていた折、京都<sup>みやこ</sup>へ上洛<sup>のぼ</sup>つて、清水へ詣つた時に、稀 《たまたま》 一度父の手に入ったことのある品なの

である。

八坂の下の古い古物屋に埃にまみれてあつたのだ。彼女の父は、舞樂にも嗜たしなみのある人だったので、すぐ、

(これは——)

と眼をつけて買い求めた。琉球りゅうきゅう朱で赤く塗つてあつて、銘

には、「杜鵑管」と、金の針金を象箴ぞうかんしたように、細く小さく

記してあつた。

(いずれ、由緒よしある若武者か、氏のよい公達きんだちかが鍾しゅう愛あいしたものにちがいない)

彼女の父はそう云つた。

そして、加茂の流れに近い旅たび舎のいえで、彼女にそれを吹けと云

つた。八雲は、輿に乗つて吹いた、その折、侍女こしもとの萩乃もそばに居てそれを聞いていた筈なのである。

みだれ世の赤縁えにし

すると――

その名笛が、縁になつて、同じ旅舎に泊つていた越後さむらいの士と懇意になつた。身分は、その士のほうが高いくらいであつた。卑しくない父子おやこなのである。

(てまえは、春日山の上杉弾正少弼しょうひつ謙信の家来、安中越前守長房、これなるは伴の三郎進さぶろうすすむと申すもので)

と、その父子おやこは名乗つた。

安中あんなか父子は又、

(主人謙信より申し遣わされて来た菊亭右大臣家の御用もはや済みましたので、この数日を、都見物にくらして居るところです)

とも話した。

縁というものであろう。それから七日ほどを、この父子おやこと父娘やことが、打ちつれて洛中洛外の名所あるきをしている間に、北条家の東郷五郎左衛門と、上杉家の安中越前とは、すっかり気心が合つて、

(其許そのもとの娘を、倅たまたに賜たまわらぬか)

(当人あたさえ、よいならば——)

と云うような談はなしになつて、それでは、帰国した上で、双方の主君の許可ゆるしを得て、改めて、日もきめよう、結納ゆいのうも交まそうとなつた。

で、三郎に訊くと、

(是非)

と云うし、八雲の心をただすと、これも、

(お父さまの思し召しのままに)

という答え。勿論、わるくないのである。二人の父は、この幾日かのあいだに、若い息子と、若い娘とのあいだに、どういふ感

情がながれていたか位は、充分に知っていたので、

(そうだろう……)

と、老後の楽しみを予想するような和やかなほほ笑みを見交した事であつた。

そればかりではない。

愈、別れに臨んでは、口約束だけでは心もとないとあつて、

三郎進すすむは、

(何か、御息女のおしるしを戴きたいが)

と、自分の意志いしのかたい所を見せて、こう希望を述べると、

(御もつともな仰せ。しかし、旅先のこととて、何もござらぬが、それでは、娘が吹いた笛の音が、この御縁をむすんだこと故、途



中で求めた品でござるが、この杜鵑とけんと銘なづけた一管を、お誓しるしいの証  
がわりに、お持ちくださるまいか)

東郷五郎左衛門のことばに、

(それは、何よりの品)

と、三郎はよろこんで、携たずさえて帰つたのである。そして、後に  
届いた彼女への便りには、

——お身の唇に濡れたることもある笛と思えば、わが唇の触る  
るごとに、音もおののき、身も慕わしゆうおののき候て。

などと書いてあつた事もある。

云う迄もなく、八雲の思慕も同じだった。いや、女ごころは、  
外にあらわさないだけに、もつともつと、埋うずめ火のようにつよい

ものがあつたかも知れない。

所が、その誓いは、果されなかつた。

なぜならば――

まず第一に、北条家の主君、氏政がゆるさなかつた。越後の上杉家とは、それから間もなく、上野こうずけのくに国の国境で、小競こぜりあいがあり、甲州の武田たけだしんげん信玄は、久しく鳴なりをひそめていた鼓こを鳴らして、

(わが甥、氏政のために)

と出兵の口実を藉かりて、上杉勢の退路を断ち、沼田、吾妻、碓氷すいの各所で、烈しい合戦が繰りかえされて来たのである。

甲斐かいの武田信玄は、小田原の北条氏政にとっては、母の弟にあ

たるので、この叔父は、天文十六年の冬以来、越後の上杉謙信と干戈かんかを交え始めてから、互いにその領土を侵したり侵されたりしつつ、幾度か川中島に両軍から出張つて雌雄を決しようとしたり、また幾度か和睦わぼくを議しては和せずわに立ちわかれて、宿命的に、越後と睨にらみ合っている仲なのである。

北条家としては、「金持喧嘩せず」という諺ことわざのとおり、自分の領地が侵害をうけない限りは、精銳無比な越兵とも事を構えたくないし、尚更、叔父信玄の持つあの精悍せいこんな甲州軍とも争いたくない。

けれど、上杉勢としては、何うしても三国の嶮をこえて、上野国から相武の海へと、その覇力を伸ばして来るのが自然の勢であ

つたし、その志を遂げさせては、自分の大望さまたに邪さまたげありとしてい  
つも、横槍を衝き入れるのが武田信玄なのであった。

北条家の領土は、そうして、幾度か越兵に蚕さんしよく食くされては、  
その度毎に武田勢が奪回してくれていたが、年々、越後の上杉勢  
は、上州から武蔵へと、一城一城、羽翼こまぬをのぼして来て、近年で  
は北条勢も武田勢も、まったく、手を拱こまぬいて、越後から三国山脈  
をこえて襲りようげんう燎げん原の火のような侵略を見ているほかない状態  
であった。

然し、それをいつまで黙って見ている信玄ではない。時機ときを見  
ていたのだ。

ふたたび、所々で合戦が始まった。

戦いくさが起ると、

(西からどこを攻めよ。東からどこを衝け)

と、甲州の叔父からは頻々と、甥の氏政へ軍勢の催促がくる。

甲斐の敵とする上杉謙信は、同時に、北条家の敵ともなるのであった。そういう三国三すくみの一時的な平和のやぶれる気運が見えたので、主君の北条氏政が、東郷五郎左衛門の娘と、上杉家の家士との縁ぐみを、

(ならぬ)

と、黙殺もくさつしていたのは、当然なのであった。

願い書を主君の手もとへさし出してから、一年とも経たないうちに、東郷五郎左衛門は、甲相聯合軍の陣にあって、武州の平野

戦で討死にしてしまった。

以来、甲越相三国の戦は絶え間がない。

おとし——去年——今年と。

東郷家には、五郎左衛門の死後、何の沙汰もなく、もちろん八雲の縁ぐみ届けも、そのまま永劫えいごうに闇から闇への運命になっている。

親戚の者が、彼女に対して、

（あの届け出は、殿も、もうお忘れであろうから、誰か、同藩士の子息を、むこ 聲にむかえて、東郷家の名跡をつがせ、家督再興のお願いを出してみたらよいと思うが……）

と案じて計る者もあったが、八雲は、

(でも私には、いちど誓った良人おとがありますから)

と何日いつも、きつぱりと首をふつて云う。

従つて、彼女の立場は、だんだんに不利になつて、禄ろくも途絶え、外出も制限され、他ほかから来る書状もいちいち監視をうけて、北条家の城下に住みながら、北条家の臣からは、まったく、他国者扱いにされていた。

——そうした彼女自身の心と、彼女を繞めぐる事情とが、この古い武家屋敷に、女ふたりの主従だけを取り残して、他目よそめにも勿体ない程な若さと美しさを、空しく鋦びょううち打の門の中に閉じ籠めさせて来たのであつた。

## 潮鳴の胸

『——でも、姫様ひいさま、おかしいではございませんか』

萩乃は又、考え直して、八雲のことばに疑いはぎを挾はさんだ。

『なぜ？』

『なぜと云つて、あの杜鵑管を、どうして、飴売りなどが、持つて居りましょう。安中三郎様が、かりそめにも、人手にわたす筈はございません』

『そうとは限るまい。きっと、あの飴売りは、三郎様の密使でし



よう』

八雲は靈覺者の宣示せんしのように、信念のあることばで云った。

『そうでしようか？』

『そうです』

『じゃあ、そつと出て、どんな飴屋か、見て参りましょうか』

『……え』と、欣うれしげに、

『だけど、家中の者に、気づかれないように』

『抜かりはございませぬ』

萩乃は、裏門の潜くぐりから、往來の眼をしのんで出て行つた。

召使もずいぶん多かつた中で、たった一人、今日まで残つていて、寝る間も、主人の身边に細い氣くばりをしている萩乃だった。

——うしろ姿を見送つて、八雲はふと、

(彼女も若いのに、私のために——)

と、済まないような心持に、ふと、まぶた 瞼を熱くした。

けれど、萩乃は、元気者だった。いつも、愛嬌のある黒い糸切齒を見せて、うれ 愁わしげな顔をしたこともない。

今も、やがて、いそいそと戻つて来て、

『姫ひいさま!』

と、息をはず弾ませて寄り添った。

『どうでした』

『やはり、姫さまはお偉いと、つくづく頭が下がりました』

『そんな事より、笛の持主は』

『上杉家の乱らっばもの波者で、安中三郎様の手勢についている石田大七殿でございました。——そして、笛もやはり、姫さまのお察しどおり、あの杜とけんかん鶉管でございました』

『では、三郎様が、私へお便りを下さりたいたいに』

『そうです。この笛を携たずさえてゆけば、お疑いもあるまいし、又、姫さまの居所をたずねるにも、何かの便りになろうというお考えで、石田大七殿へ、お預けなされたのだそうでございます』

『そうか……』と、八雲は、あれ以来毎日、思いつめている三郎進の姿を、今も濃く脛すねに描えいているように、

『——してお手紙は』

『これに』

萩乃は窓を閉めて、なお屋敷の庭や次の間なども注意ぶかく見まわしてから、帯の間に秘かくして来た密書を、そつと、主人の手に握らせた。

八雲は、封を切ると、

『おなつかしい』

と口の裡うらでつぶやいた。もう、処女おとめらしい涙をいっぱいにたたえて。

『お読みになつたらすぐ火に燃やしてくれと使の大七殿が申しました』

『そうですか……』

焼くのも残り惜し気なのである。彼女はなんども読みかえして、

吐息をついた。

『姫さま。お便りの中は、何んな事でございますか』

『——御覧』

萩乃にそれを渡して、彼女は、自分の小机のまえに坐りくずれてしまう。

この悶えを、この情熱を、遣り場なく喘いでいるようなそのうしろ姿——

萩乃は、彼女と背中あわせに、許されたその秘密の文を読んでいた。

八雲どの。

去ぬる年の都の誓いを、この身は忘れてはいない。神かけて、あの誓いは胸に刻みこんでいる。

然し、乱れ世の若人わこうどの儂はかなさよ。戦いくさと恋は両立しない。しか

も、弓矢の捨てられない武人であることを、君もゆるせ。――ただここに、二人の希望をつなぐ一途がある。

それはおん身が、城地の監視をやぶって、私の城へ逃げてくることだ。幸にも我れ等は今、安中城に立てこもって、武田の遠征軍を蹴ちらしている。

貴女あなたに、その勇氣があるかどうか。幸にも、もし来給うならば、使の者に、その旨を齎もたらしたまえ。われは、死を冒おかして、古河の利根川べりの辺りまで、手勢をひいてお迎えに参ぜん。

必ず吉報のお返しあらなんことを、信じて待つ。

永禄六年二月

三郎進

二度ほど繰返しているうちに、紙のうえに黄昏たそがれが漂った。燭を点つけて萩乃はその燈ひに手紙をかざした。ぼつと、音をたてて紙は一片の焰ほのおになってしまふ。

『姫さま！ ……』

後うしろへ摺すり寄すつて、八雲の耳もとへ、強い——低い声で、ささやいた。

『お書きあそばせ、御返事を——。その御返事を、大七殿が、今

夜、御幸浜みゆきがはまで待っているはずでございませう

『なんと書こうぞ、あの、真実なおことばに対して』

『真実なおことばには、真実を以てお答えするよりほかはありませぬ。姫さまの真実とは、常に仰つしやっているように、女の道を踏むという事でございませう』

『では、この小田原を』

『お逃げあそばせ、萩乃が、一命をもつて、お供いたしまする』

『でも、御先祖からの主君の地を』

『では——女の道はどう遊ばしますか』

『ああ……』

と、泣き伏したが、すぐ、



『萩乃。——硯すずりへ水を』

と云つた。

筆と紙とを持つた八雲の面おもてには、つよい意志が坐っていた。燭の明りがその横顔の情熱を明々と焼いている。

『——行つて参ります』

夜は出やすかつた。

梅花うめの多い城下である。錦小路のくら闇には、ほのかな香がうごいていた。町をまっ直ぐに突きぬけると、松の樹の間が青白く光っている。そして、ざあつと濤なみの階音が裾を吹いてくる。

萩乃は、涙を見まわした。

『大七様あつ……』

約束の人影は見えないのである。ここだと云った巨おおきな松の下にも。その附近にも。

『どうしたのだろう？』

行きつ戻りつしていた。——すると、浜に曳ひきあげてある一艘そうの漁船の中から、

『おう、東郷家の召使か』

と、人の声がした。

思わず、はいと答えながら側へ走って、

『大七殿か』

寄ると、途端に、

『捕れっ』

と、苦とまを刎はねて云つた者がある。

萩乃は、その顔を見て、

『あつ——』

と、身ぶるいして蹠よろめいた。

どこに潜んでいたのか、砂を蹴つて、真つ黒に彼女をつつんだ人影が、彼女の必死な反抗をたたみ伏せて、後ろ手に縄をまわしてしまった。

×

×

×

×

帰ろう筈はない。——帰らぬ萩乃を、八雲は、不安な胸をいだきながら待っていた。

『どうしたのであろう？ ……。もう夜も更ふけるに』

つい窓を明けてみた。

すると、誰やら、笠をかぶって、窓の外の夜更けを通って行く

人影が、扇おうぎを口に当て、

はや潮の――

うしおに巻かれて

迷うよ

友の千鳥は。

はや潮の――

寄せくる磯ぞ

立てよ

残る千鳥は。

夜霞よがすみの小路の辻へ、謡うたいながら消えた。

『あつ？ ……。今の謡は』

しきりと、海鳴うみなりの音が先刻さつきから胸底に騒いでいる所である。

八雲は、はつとして、そこを閉めた

間もなく、燭もふき消した。奥で、物音だけが暫く密ひそかにして  
いたが、やがて庭境の塀のやぶれを潜くぐつて、隣地となりの大宗寺の林か  
ら丘へ逃げのぼった。

ほつと、息をついて何気なく、わが家の方を振り返つて見ると、

何とあぶない一刻の差であつたらう。表門裏門から提ちようちん灯たや松たをいまつかざしてなだれ込んだ奉行所の手勢の声が、そこまで風に送られてくる程だつた。

### 立ち寄る軒

『丑うしぞう蔵……。開けておくれ。……丑蔵』

そぼ降る小雨のあいだに、こう人声がして、誰かはばか憚るように戸を叩く者がある。

酒さか匂わがわ川の上流で、井細いさい田村たむらと足柄あしがら村に跨またがっている小さい部落らくだった。五、六軒しかない筏いかだ流ながしを職とする土民の家もみな寝ているうちに、そこの一軒だけが、微かすかに、破れ窓から灯影を見せている。

『——誰たれだい？』

丑蔵の女房のお菅すげらしい返辞である。やがて、がたぴし、内から戸をあけると、

『あつ、御城下のお嬢様？』

吃びっくり驚おどろしたのであろう、大きな声で云った。

『叱しつ……』

霧のような雨を巻いて風が屋内の燈ひを暗く揺りうごかした。八

雲は、脱いだ蓑みのをお菅の手にわたして、

『静かにしておくれ。やつと、人目をしのんで来たのだから——』

『ようお出でなさいました。こんな暗い雨の道を』

『雨の道より、方々に、私を捕とらえようとする奉行所の立札たてふだが廻つていたので——。お前も、噂をお聞きでしよう』

『はい、きょうもううちの良人ひとと、噂をしていた所でございますよ。

さあ、炉ろばたへお寄んなすつて』

お菅は、薪まきをくべ足して、

『生憎あいにく、うちの良人ひとも、小荷駄衆のお侍から出頭しろといわれ

て、夕方、酒匂のお役所まで行きましたが、もう間もなく戻りましょう』



そこに坐つて、濡れた袂たもとや裳すそを乾かしていると、小雨の音はしなかつたが、酒匂川のすさまじい河鳴が遠く聞えてくる。

ここの主あるじの丑蔵あはらというのは、父の死ぬ頃まで、長年、東郷家の仲ちゆうげん間まをしていた者なので、この夫婦ならばと見込んで、八雲は、訪ねて来たのだつた。

あれからの数日は、茨いばらの路そのものだつた。奉行所の者が、頻しきりと立ち廻つて自分を詮議せんぎしているらしいので、昼間は当然、危険で歩けなかつた。

『お寒うございますから、こんな物でも——』  
と、お菅ぞうすいが雑炊ぞうすいをこさえてすすめる。

『ありがとう』

八雲は箸はしを取った。そして、変らない人の情なさけを心のうちで拝んでいた。

間もなく、丑蔵が帰って来た。仲間をしていた頃から、よく力自慢をしていた体のいかつい男ざかりの漢おとこである。どこかで飲んで来たどみえ、酒のにおいを持っていた。

八雲の姿を見ると、丑蔵は、酒で濁っていた眼を醒まして、『これは——』と、朴ぼくとつ訥ならしく、畏かしこまった。

『お前に、頼みがあつて来たのです』

『わしのような者でも、思い出して下さいましたか。この丑蔵にできることなら』

『ほかではないが、筏いかだを出して、私を、今夜のうちに、河向うま

で渡してくれませんか』

『お易いことで——と云いたいが、お嬢様も知つての通り、又、甲斐の武田方からの督とくそく促で、御当家からも御軍勢が続々と出ているところだ。この辺りの筏は残らず徴めしあ発げられて、一艘だつて有りはしませぬ。往来は、御城下の橋と、この井細田の舟橋とのふたくち一一口に限られて、それも、手形がなくては渡れまぬ』

『では、無理ではあろうが、お前の家には、その手形があるでしょう。それを私に譲つて下さい』

必死な光をたたえた八雲の眸ひとみである。

丑蔵は、考え込んでいたが、

『よろしゅうございます、永年の御恩返し——』

と、重くうなずいて、

『実は、こんどの御合戦に、わしも小荷駄こにだの軍夫に召募めされて行くことになりましたから、その手形を失つては、組頭がしらに云い開きが立たねえが、なあに、間違つたら、この首をやると思えば大した事はない。お待ちなさいまし』

と、懐ふとこ中から小荷駄奉行の焼印が捺おしてある小形な木製の鑑札を出してそこへ置いた。

『ありがとう、この恩は忘れませぬぞ』

押しただいて、八雲は、もう起ちかけるのであつた。

『——だが、お前の首にかかわるような事があつてはならないから、私が、舟橋を渡つたら、河向うにある地藏堂の絵馬額えまがくの裏へ、

この手形を返しておく故、誰か、そなたを裏切らぬ友達にたのんで、そつと取つて来てもらえば無事に済むでしょう』

『なる程、それはよい思案だ。——だが、舟橋の関所で、見破られないようにしておくんなさい』

丑蔵は、彼女にみの蓑を着せかけながら云つた。大丈夫——と答えはしたけれど、八雲はそこが生死の境さかいであることを覚悟していた。すそ蓑を高くから括げあげて、わらじ草鞋をはき、竹の子笠を被り、短い小脇差を差しているのである。

『戦の後には、きつと、便りをよこします。お菅も、無事で暮してください』

白い雨の光が、軒先に光つた。

泥<sup>ぬ</sup>凪<sup>かるみ</sup>の闇へ消えてゆく跫音を見送って、丑蔵はそこを閉めたが、上にはあがらなかつた。お菅が見ると、良人も、草鞋の緒を結んで、蓑を被<sup>かぶ</sup>ろうとしているので、

『おまえさん、これから、何処へ出かける気だえ』

と、咎<sup>とが</sup>めた。

丑蔵は、笑って、

『金儲<sup>もう</sup>けだ。——密訴した者には、銀五十貫をつかわすと、御高札に出ているのを知らねえか』

## 失恋軍功帳

数百頭の馬の背が暗い河原にならんで雨に打たれていた。夜が明けたら川を越えるばかりにして兵も将もしょう甲か冑ちゆうをつけたまま小屋や幕の蔭に眠っている。

舟橋の入口には、大篝かがりび火が二カ所に焚たかれ、その赤い光をよぎって、軍夫や、商人や、農夫や牛馬などが、夜どおし往来していた。誰の眼にも、戦時だという緊張した光があった。

『組頭ぬつ。——お頭ぬつ』

濡ぬれた陣幕の中へ、首を入れて、丑蔵がどなった。

軍夫頭の魚住うおずみじゆうすけ十介が、すぐその番小屋で、番士たちと共

に、戦いくさの話をしていた。

『なんだ？』と振向いて——『貴様は、筏方いかだの丑蔵じゃないか』

『へい』

『何か用か』

『ちよつと、お顔を拝借したいんで』

『俺に？』

と、魚住十介は、そこから出て来た。丑蔵は息を弾ませながら、東郷五郎左衛門の娘が、自分の鑑札を持ってここを通る筈だから捕まえてもらいたいと密告した。

『いつ頃だ、それは』

『もう一ふた刻ときほどばかり前で』



『すると、宵よいの口じやないか』

『へい』

『たわけ者が、今頃云つて来て何になるっ』

十介は、嶮けわしい顔いろをして怒った。

この対岸にも、あした出陣する兵が千人以上も屯たむろしている。そこへの用を帯びて、すでに宵から幾人かの家中の女が舟橋を通っているから、その中には、詮議中の八雲が居たかも知らないのである。丑蔵の密告は、遅おそまき時ときだった。

『なんですぐ云つて来なかつたか。左様な事を申し立てるが、実は、肚をあわせて、逃がしたのだろう』

『ど、どういたしまして、遅くなったのは、女房の奴が、あつし

の事を、恩知らずだの糸瓜へちまだのと、逆らいだてして狂うので、そいつを物置小屋へ叩たたつ込んで来るために手間どってしまったんで。

——忌々しい畜生だ』

『しかし、捨てては措けん』

魚住十介は、番小屋の番士たちへ、早口に仔細を告げていた。

すると。

小屋の側手わきに積んである兵糧ひょうろうだの陣具だの濡らしてならな

い品を囲んである中に、紺糸緘こんいとおどしの鎧よろいに、黒革の具足をつけた

武士が、幕を引つ被かついで眠っていたが、むつくりと起きあがって、

『おい十介、あわてるな』

と、声をかけた。

十介は、振り顧つて、

『おう、相木あいきどの殿か』

『ああ、よく眠つた。……戦いくさのまえに寝ておくのは、働く前に飯を食べておくのと同じだ、そちのように、御城下を立つ時から眼を光らしては、戦場へ着いてから碌ろくな働きはできんぞ』

『ですが、慌あわてずに居られない大事が、出しゅったい来たいいたしたので』

『今、うつうつと、眠りながら聞いていた。——東郷五郎左衛門の娘八雲が河を越えたというのだろう』

『さようで』

『はははは』

肩をゆすぶつて、相木熊くまくす楠は笑つた。

まだ三十歳にもならない武士であるが、戦のたびにこの男の名は北条家のうちに重きをなして光っていた。人の為し得ない軍功をきつと土産にして凱旋するのだった。つい数年前までは、槍組の軽輩であつたのに、今度の戦ではもう先手組の侍頭として、五百人の兵をあずかつて出陣を命じられている。

彼に、戦の極意を問う者があると、

(死ぬことだ。他にない)

と、いつも笑つて云う。

戦焦けとでもいうのか、顔の皮膚は南蛮鉄のように黒くて

艶があつた。胃の緒のあとが薄白く焦け残っている程なのである。

豪快な性質で、いつも軍功帳の筆頭には坐るが、決して小才には

立ちまわらない、むしろふだんは眠たげに口を結んで、底光りする眸を濃い眉毛の下に鬱陶うつつとうしそうに半眼はんがんに塞ふさいでいるといった風だ。

『多寡たかの知れた女ひとりに、そう立ち騒ぐこともあるまい。誰よりもよく八雲の顔を見知っている此方が、一鞭ひとむち当てて捕えてくる』

そう云うと、相木熊楠くまくすは、自身で一頭こまの駒を曳き出して来て、舟橋ふねはしの架かけ板いたのうえを巧ひづめみな蹄ひづめの音ねに躍はらせて、忽たちち、河彼方かわむこうへ飛ばして行いった。

『なんだ、人を制とめておいて、自分は怖おそしく気早きばやに駈かけて行く。いつも、先陣せんじんをやるのはあの手だな』

魚住十介が呟いて見送っていると、

『それアその筈だよ』

と、番士のひとり、小屋の中で相槌を打った。

『なぜ？ ……。何か、意味があるのか』

『あるとも、知らないのか』

『知らん』

『迂遠うといな。御家中で知らぬものはない位な話だぞ。——あの相木熊楠という男は、以前、東郷五郎左衛門に就いて北条流の軍学を学んでいたことがある』

『それは、俺だつて知っている』

『それだけ知っていても何もならん、話はその先だ。相木熊楠、

あんな みょうちんぎた 明珍鍛えの面頬そのままな顔しているが、あれで、色  
気があるのだ』

『それアあるだろう』

『軍学を習いならに通っているまに、五郎左衛門の娘、八雲どのに、  
こツそり恋をしたものらしい』

『ふうむ』

『おかしいだろう』

『すこし、おかしい』

『で——師匠の五郎左衛門に、自身で、申し込んだというのだ』  
『なにを』

『八雲どのを妻にくれと』

『はははは。……ウム成程』  
なるほど

『その頃、彼はまだ槍組の足軽、先は千貫取りの侍だ、格がちがう、当然ことわりを食った。——だが、東郷五郎左衛門も、ただは断らなかつた。熊楠を励ますためか、口実に過ぎなかつたか、そこは分らぬが、とにかくこう云つた。——貴様もはやく一かどの武士になれ、よい妻を持ちたいと思うならば、恋よりは、男は、仕事<sup>てがら</sup>が先だ。よい軍功<sup>てがら</sup>をあげさえすれば、嫁などは、三国中の好きな女を選ぶことができるではないかと。——それからだ、熊楠が、岩櫃山<sup>いわびつやま</sup>の城で、一番槍一番首の名のりをあげ、又、野火止<sup>のびどめ</sup>の合戦では、大将首を取つたりして、合戦の度ごとにぐんぐんと足軽組から抜けだして立身して来たのは』



『すると、彼に苦言を与えた東郷五郎左衛門は、熊楠にとって、  
鞭撻べんたつの恩人だな』

『ところが、人間、そうとる奴はないからな』

『恨んでいるのか』

『そういう噂だ。もつとも、先もよくない。出世しゅっせしたら、娘を

やってもよいような事を云っておきながら、五郎左衛門父娘は、  
その後、旅先で、今度、御当家と合戦になった上杉家の家臣と、  
婚約を取り交している。——相木熊楠もいい気持ちはしなかつた  
に相違ない』

『ははあ、それですつかり読めてきた』

『わかつたらう、熊楠の意中が』

『道理で、先頃から、八雲のことというのと、今夜のように自分が先に立つ。——東郷家の小間使、萩乃を捕まえて拷問ごうもんにかけたのも、熊楠だった』

『それも腹癒はらひせなのだ』

『まだある。敵の安中三郎進から八雲のところへ密使をよこしたのを、逸いちはや早く知って、その乱波者らっぱものを召捕らえ、八雲の邸へ奉行所の討手を向けたのも、後で聞けばみな熊楠のさしがねだという』

『恋の意趣いしゆは、古来からおそろしいものに極っている』

『まして、あの男のことだからな。八雲も、とんだ人間に想われたものだ』

『想われただけならよいがさ……。後が怖こわいて』

『はははは。いくら剛勇な熊楠でも、恋は戦いくさのような腕うでづくでは勝てぬからの』

『安中三郎進のため、戦の軍功帳の誉ほまれは見事奪とられたわけか』

『そのかわりに、見ておれ、こんどの安中攻めの合戦では、熊楠が、いつもの戦たたかい以上いに強いから——』

笑い興じていると、すぐ下の河原のふちで、馬蹄ひづめの音が、憂かつつ——と石に響いた。

『あつ、戻かえつて来たらしい』

『熊楠か』

魚住十介を初め、ぴりっとして、口を緘つぶんでしまう。

とぼり  
陣幕の外の士卒に、駒をあずけて、相木熊楠はずかずかど入つて来た。鎧の鍛具うちものや太刀の柄に、雨のしずくが燦々きらきらと溜つて  
いる。

『残念なことをした』

床几しょうぎへ、ずしりと、腰をおろして、

『喉がかわいた。十介、水をくれ』

と、よほど無念らしい。

魚住十介は、水柄杓みずびしやくへ一掬すくい汲んで渡しながら、

『八雲は、捕まりましたか』

『ばかを申せ』と、怖しく不機嫌で——『八雲がこの舟橋をこえたのは、すでによほど前ではないか。余りに時刻ときが経ち過ぎてい

る為、いかに駒をとばしてみても見当らぬ。それに国府津の郷か  
ら先は、岡本勝政の陣所となる。いつたい、この密告は、何者か  
ら出たのか』

『いかだ  
筏方の丑蔵と申す者ですが』

『ふとど  
不届きな奴、八雲を落しておいて、時経てから、忠義がましく  
訴え出るなど、食えぬ下郎げろうではある。ここへ連れて来いっ』

『はっ』

恩賞を夢みながら、陣所の陰に、腕拱ぐみして佇立たたずんでいた丑蔵  
は、十介のすがたを見ると、

(呼びにきたな)

にやりと、白い歯を見せた。

いきなりその襟がみを引つ搦んで、十介が、

『丑藤、ちよつと来いっ』

ずるずると、引摺ると、

『あつ、だ、旦那。何するんで？』

腰を蹴放されて、泳ぐように陣幕とぼりのうちへ跟よろけ込んだ丑蔵は、

相木熊楠の厳しい眉を仰ぐと、あわてて逃げかけた。

熊楠は、その背へ向つて、

『仔細を存じおりながら、訴えを怠りおつた不埒者ふらちもの、軍律に照らすっ』

丑蔵は何か喚わめいて跳びあがつた。とたんに、熊楠の陣刀が憂かつと鳴った、鞘から噴いた白い光もとの下に、丑蔵の大きな体は紅殻樽

をあけたようにころがつた。胴を離れた首は、雨にたたかれて、見ている間に臙脂色えんじのあぶらを泥濘ぬかるみにひろげ、蠟よりも青いものになった。

『十介、三軍の見せしめだ、首を、河原へ曝さらしておけ』

もとの板囲かこいのうちへ入って、干飯俵ほしいだわらや軍いくさごり 梱くのあいだに熊楠は又眠ってしまった。魚住十介たちは、ゾツとした気持に襲われながら、

(気をつけろ、機嫌がわるいぞ)

と、囁ささやき合った。

矢来の竹を一本抜いて来て、十介は、その先を刃物で尖とがらせ、無造作むぞうさに丑蔵の首を突き刺して黙々と河原へ下りてゆく。

丘も馬も暫ししばを眠っている、明日はどこに陣あしたをすることか、水かさの増した大河を蕭条しょうじょうと打って、雨はいよいよ暗い。

齧齒むしばむすめ

南部馬だの、鉄だの皮革かわだの、又砂金などを小田原へ売り込みに来る奥州船は、帰りには、織物雑穀などを仕入て、御幸みゆき浜はまから碇いかりを抜く。

それへ、大勢の旅客も、ごたごた便乗していた。



雨が霽あがつたので、

『晴れましたぜ、いい按配に、波も穏かで』

客は、船底から這いだした。

『よく降りましたな。あなたは、どちらですか』

『石いし巻のまきで』

『そちらは』

『わしやあ、塩しお竈がまだが』

『御遠方だな。どうです、儲かりましたか』

『戦いくさのお蔭で、今年はこれで二度目の行商あきなでさ。百姓衆にはお

気の毒だが』

『こんどの軍いくさも、大きくなりそうですぜ。さしもの武田勢も、信

州武州までは、一捲きにして来たが、上州箕輪みのわの城が落ちない。松井田城と安中城のふたつも、安中越前守と、三郎進という父子おやこの両大將が守っていて、これも頑がんとしている。北条様からも五、六千人繰り出しましたが、どうも、長引くでしような』

そんな話声に背を向けて、先刻さつきから荷梱にくりへ倚よりかかつて居眠つている百姓娘があつた。草鞋わらじばきでもんぺを穿はき、無造作に束ねた髪へ、藁わらごみがたかっている。

時々、帆ほの音に眼をさますと、退屈たいくつそうに、その眼めが陸おかの影をさがしていた。

『娘さん、何処まで行くんだい』

側にいた三十がらみの——この船の客のうちではいちばん都会

人らしい——手甲脚絆きやはんで身軽に装った町人が話しかけた。

『おらかい？』

娘はぶつきら棒に、

『古河こがへ帰えるのさ』

『じゃあ、江戸しやうの庄で降りて、後は歩くのだな』

『ああ……』

と、鴉からすのような返辞をする。

そして袂いりまめから煎豆を出して、ぽりぽり食べ初めたが、時々、愛くるしい唇の間から、虫蝕むしくいで黒くなった糸切歯やえばが見え、あま  
り歯が丈夫でない質たちとみえて固い豆がよく齧かめない。

『わしも、古河から上州の方へ出ようと思うのさ。ちようど、道

は一緒だな』

『おめえさんは、何屋だね』

『御城下の外郎屋ういらうやの若い者さ』

『あ。薬売さんか』

『血どめだの、陣中膏ここうだの、種いろいろ々な薬種くすりを持つちやあ、方々の

御陣所の御用を聞いてまわるのさ。生命がけの商売だよ』

『……………』

返辞がないと思つたら、田舎娘は、顔に笠を当てて、また居眠つていた、よく眠る娘である。つよい陽が、雲間から急に射してきた。誰か、大きな欠伸あくびをする。

その春の陽が、真つ紅かに沈むころ、奥州船は、右を見ても左を

眺めても、芦あしばかりな入江にはいつていた。怖しく広い川幅を、帆を垂らして徐々に溯さかのぼつて行く――

客のひとりが、原始林の如く鬱うっそう蒼そうとしている左岸の森を指さして、

『あそこの森の中に、観音様の祠ほくらができて、この頃、時々人が詣るそうなの』

『この辺は、何てえとどこですか』

『江戸の庄のうちで、浅草というのでさ。あの丘が、汐見山とも、待乳山まつちともいう』

『じゃあ、ここが、梅うめわか若わかが人買に殺されたという隅田川か。：

…さびしい所だなあ』

白い川霧が降りていた。

漁村の灯が、チラと二つ三つ見える。そこが橋場の宿だった。

外郎売は起ちあがって、

『やれ、着いたか。……皆さんお先に』

船に残る人々も、

『気をつけて行かつしやれよ』

淡い旅情が漂う。

宿場といつても、ひどい茅ら屋が、薄暗い燈芯の明りを洩ら

して、三、四十軒ほどあるに過ぎなかつた。

『おや?』

外郎売は、さがしていた、その眼を避けるように、船から降り

た田舎娘は、一軒の木賃宿きちんやどへついとかくれた。

『む、……あそこか』

見届けておいて、外郎売は何処へか立ち去った。

その晩である。もう、夜半よなかに近い時刻。

この宿場を、十人、二十人位ずつ、具足だけ着けた兵が、疲れた足で駆けて行つた。

馬の駆けてゆく音もした。

『なんだろう?』

旅人は眼をさしましたが、木賃宿の家族などは、近頃は、兵馬の音に馴れてしまつて、豚のように眠っていた。——するとやが、

『この辺を一応さがせ』

がやがや引つ返して来た北条方の兵が、一軒一軒、たたき起して、ここの木賃宿へも三、四人入つて来た。

### 畑の天人

『怪しげな奴は泊っていないか』

外の兵が、軒下から呶鳴ると、

『居ない居ない』

と、首を振りながら、木賃宿へ<sup>あらた</sup>検めに入つた連中は出て来た。



『とうとう逃がしたか』

『女で、あんな巧みに、馬を操あやつるものがあるだろうか』

『それや、兵学家の東郷五郎左衛門の娘だもの。馬術ぐらいは』

『その馬も、陣所から、隙をうかがって奪って行った馬だぞ。不敵さの底が知れぬ』

『一心だからたまらない。——親のゆるした——しかも自分も愛している未来の良人の立て籠こもる城へさして行こうという女ごころ。

——これには、男が戦にのぞむ勇氣もかなうまい』

『男と生れたら、そういう女に、一度は想われてみたいな』

『足軽では、まず見込みがない』

『ははは。だが、相木熊楠ほどな軍功のある男をも振り向かない』

ところを見ると、身分や、男振りには関かかわるまいぜ』

断念したとみえて、人数をまとめて、引揚げて行くのであつた。  
木賃宿の亭主は、

『せつかく寝たところを、起されてしもうた』

ぶつぶつ呟うしろいて、後の戸を閉めたが、ふと、女房や子ども達の寝ている夜具のすそに、見馴れない田舎娘がもぐっているのがついて、

『あれ？ぬしやあ、誰だ』

『おら、宵に泊った客だがな』

と、田舎娘は笑つた。

『なんじや、お客か。ここはわし達の寝るところじや。戸惑いす

るも程がある』

『でもな、怖くて怖くて。もうお士<sup>さむらい</sup>たちは去<sup>い</sup>んだかの』

『去<sup>い</sup>んだわ、起きなされ』

亭主は、蒲団をめくった。

要心のいい娘である、足ごしらえもちやんとしていて、

『御免して下され』

謝<sup>ま</sup>まって出て行<sup>い</sup>った。間<sup>ま</sup>がわるいのか、翌朝は、この娘が一番早く宿<sup>た</sup>を発<sup>た</sup>った。

隅田河原で、娘は、もんぺの下紐<sup>く</sup>を括<sup>く</sup>りあげていた。

『——深い所もあるから気<sup>か</sup>をつけな。負<sup>か</sup>ぶつてやろうか』

馴<sup>な</sup>々しい声に、振<sup>か</sup>り顧<sup>かえ</sup>つてみると、きのうの外郎<sup>わらわ</sup>売である。

ざぶざぶと、外郎売は、先へ渡つて行つたが、娘が、草加並木まで来ると又、

『女にしては、脚がはやいね』

並木から腰をあげてついて来た。

『ゆうべ、宿場のお検あらためがあつたが、知ってるかい』

『あ、知っていたよ』

『よく陣屋へ連れて行かれなかつたね』

娘は、ちよつと顔いろを変えて、

『ばかな云うて、おらは何も、連れて行かれるような悪い事はしないもの』

『だがサ、怒つちやいけねえよ、ゆうべ北条方の足軽が探してい

たのは、女だと聞いたから、それで心配してやったんじゃないか』

『女なら誰でも捕まるという法があるもんじやない』

『けれど、その女も美麗きれいな女だという噂だし、おめえも、美しい方だから』

『知らないよ』

『あ痛っ』

外郎売は顔を抑えた。煎豆いりまめが一粒、その手の指のあいだに挟まった。

娘は、ぶんぷんと、怒り顔に、足を早めてゆく。

だが、どう侮辱されても、外郎売は離れない。後になるか先になるか、きつと彼女の影から半町とは距へだたない間にあつた。

『ちつ……』

舌打ちをして田舎娘は何か思案していたが、次の日、古河の町へ入ろうとすると、ここはもういっばいな軍馬であつて、北条方の里見義介や、千葉新助などの率いて来た房総の兵が、約七百ほど屯たむろしているのであつた。

いや、ここばかりではない。

附近の部落や利根川べりの要所要所、いたる所に兵が居、馬が嘶いなないていた。平野には、母衣ほろを負つた伝令の騎馬武士が駈けているし、畑には、茶褐色の具足をつけた足軽が、槍を伏せて、夜となく、昼となく、西の方を見張っている。

戦線は近いのだ。

田舎娘は、辺りをながめて、

(ああ、遅おそかった……)

当惑の眼をみはつてしまったが、それから幾日か経つと、どこで仕入れて来たのか、餅もちだの飴菓子あめだのを入れた竹籠たけかごを腕にかけて、畑や河原の兵たちの間を売り歩いてた。

甘い物にも、女にも飢えている足軽組の兵は、

『天人が餅売りにきた』

と噪さわいで、

『天人餅か、買ってやろう』

『こつちへもくれ』

軍目付いくさの眼をしのんで迄、争って、彼女の竹籠たけかごを軽くした。

然し——どの兵も、この田舎娘の黒いやえ歯を見覚えてゐる者はなかつた。萩乃は心の裡うちで、これは八雲の側かたわらに侍かたしいたきりで、あの小田原の邸やしきに幾年も閉じこめられていた恩恵だと思つた。

『だが、油断はできない。——あの外郎売だけは、何だか、自分の素姓を知つてゐるような気がする』

——小田原から奥州船に乗るまでの苦心は、まつたく危い橋であつた。今考えると、よくもと思われるほどだつた。然し、ほんとの危難かんくや艱苦かんくは、おそらくこれから先の道であらう。これから先、安中城までの道だと萩乃は覚悟してゐる。



雨なき夕立

安中三郎進から八雲へきた手紙のうちは、

古河の利根川べりまで出で給わば、城兵をひいて、自らお  
迎え申さん——

と、書いてあつた。

菘乃は、それを唯一の目的めあてに來たのであるが、その頼りは、絶  
望に近い。

『いつぞやの夜、橋場の宿を追われて通つたのは、たしかに、八  
雲様らしかったが？』

萩乃は、餅売をしながら、それとなく北条方の足輕に訊ねてみたが、八雲の捕まったという噂は聞かない。それにつけ、

（お嬢様は、萩乃がこうしてお後あとを慕って来ているとは、夢にも御存じないであろう。……ああ早く行き会いたいが）と、念じた。

あの時。——もう過ぎし日であるが。

小田原の御幸みゆき浜はまで、萩乃を捕えた武士は、萩乃がふだんから北条家のうちで誰よりも憎く思っていた相木熊楠だった。

熊楠は、その時、さも快よげに云った。

（この小賢さかしい女には、俺自身で、糺ただしたいことがある）

彼女は、それから数日、熊楠の屋敷のうちの仮牢ほろうへ抛りこまれていた。幸なことに、熊楠には上州攻めへ出陣の命が下ったので、

邸やしきは、ごった返していた。

すると。

熊楠がいよいよ出陣した晩だった。混雑まぎれに、家来でも落したのか、牢の前に、鞆さやを抜けた短刀が落ちていた。天祐てんゆうか、それがやっと手の届くところにある。萩乃はその晩、仮牢を破つた。そして、風雨の中を夢中で逃げ、身寄みよりの漁師りょうしの家の床下、干鯛倉ほしかぐらの闇、釣舟の中の幾日と、覚えきれない程な惨苦をなめて、やっと、奥州船へ乗り澄ましたのであった。

『——そういう事とは知らない八雲様は、もう、私は獄舎ひとやの人間か、死んだ者とお思いになつて、一囚いちづに、先へお出でになつてしまったのではないか?』

萩乃は、果なく迷い歩いた。はてし

春はくれて五月——六月——

桑がしげり、麦はのびてくる。

然し、古河から利根川一帯の兵馬は、雲の峰の下に、じつと備えたまま、動かなかつた。

安中城からの迎えも見えない。

八雲の消息も皆かきもく目知れない。

餅の籠を腕にかけて、彼女は炎天の下を、

『——足輕さん、買うて下され』

桑畑の蔭を、呼んであるいた。

ところが、その日に限って、

『要らん』

『餅など頬ばつていられるか』

どこへ行つても、売れなかつた。

すると後で、

『おい、天人餅を一つくれ』

久しく、姿が見えなかつた外郎売が、ひよっこり、顔を見せて呼びとめた。

『——どうだい、売れるかい』

『ええ。陣中薬は、どうかね』

『薬のほうは、大変な景気さ。もうこの間の荷を売り切つて、小田原まで荷を取りに行つて来たんだ』

『戦いくさもないのに、よう傷薬が売れるだな』

『戦がない？ ……何を寝ぼけているんだ、深谷、本庄、秩父の鉢形、この一月ひと余りは、修羅しゆらの巷ちまただ。——そして今は、武田方と

北条勢が、一手になつて、安中城を遠巻きにしてるじゃねえか』

『えっ、安中城を』

『そうさ。たいそう吃驚びっくりしなさるね、何か、おめえの色男でも、

安中城にいるのかい』

『い……いいえ……そんな訳じゃありませんけれど』

萩乃はあわてて田舎言葉も出なかつた。

餅を食べ終ると、外郎売は

『どれ、俺も、稼かせぎに御出陣としよう』

大股に歩みかけたが、ふと、足をとめて、笠のつばに手をやりながら、

『おや、ここの陣所だけは、後うしろまき詰までうごくめえと思つたら、これやあいけねえ、此こつ方ちまで戦いくさが拵ひろがつて来やがった。今夜あたり、敵かたきが、襲よせてくるか、此こつ方ちから出てゆくらしいぞ』

独り語ごごとにしては、大きな声だ。外郎売は、そういうと、道を更かえて立ち去つた。

『——今夜あたり？ ……。ほんとかしら』

萩乃は、胸むねを躍おどらせた。——安中勢の迎えかも知れない。だが、それも八雲様が居なければ何になろうか。

真まつ赤あかに灼やけた陽ひが、夏草の蔭かげに沈しずんだ。

宵は、風も月もなかったが、やがて二更の頃になると、わあつと、鬨とぎの聲が、野や畑をゆるがした。

萩乃は、利根川の堤どてへ、駈けて上つてみた。

北条方では、かねて今夜の襲撃を、知っていたものとみえ、

『安中勢だ、蹴どてちらせ』

堤どての蔭から、雲のように、兵馬や薙なぎ刀なたの光や、槍や太刀が、

躍り越え躍り越えして、どつと、河にかかった。まるで、雨なき夕立のように。

小銃こづつの音が、ひろい闇の中で、パチパチと鳴りはためく。ひゅつ——と矢うなりが、萩乃の顔を何度もかすめた。

『おお！ ……』



対岸に見える黒い小さい何百名かの人馬——正しくそれが安中勢であろう。あの中には、安中三郎進も来ているにちがいない。

『——お嬢様あつ。八雲様あつ』

声かぎり呼びながら、萩乃は、河へ向つて、狂女のようにぎぶぎぶと入つて行つた。

珠玉たまくるまの輦

北埼玉きたさいたまの多門寺たもんじに近い方角である。この辺、桑の木ばかりだ

った。その広い桑園のなかに、いつも、箴おきの音をのどかにさせている一軒の機屋はたやがある。

多門寺の僧が、そのこの戸を烈しく叩たたいていた。

『合戦ですよ、御主人。かねて待っていた安中勢らしゅうござい  
ますよ』

——それから暫くすると、

『では、御無事に』

『お気をつけて……』

一人の女の旅人が、機屋の者に送り出されて、裏口からそつと出て来た。

八雲であつた。

『永い間、お匿かくまいくださいました上、皆様の御親切……。たとえば、この儘野辺の土になっても忘れはいたしません』

別れもそこそこであった。もう、この近くへまで、鉄砲の音は聞えている。

東郷家にとつても、八雲にも、何の縁ゆかりもない機屋であったが、多門寺の住職と道で口をきいたのが縁になつて、彼女は、ここに今夜の折おりを待っていたのであった。

その酬たまわれる日は遂に来た。今夜こそ愛人に会える。愛人の兵馬はもうすぐその利根川原へ来ているのだ。自分のために、幾い多くたの兵馬を犠牲にえにし、自分の一命をも陣頭に置いて、闘たたかってくれているのだ。

(勿もつ体たいない！)

黄金こしの輿こし、珠玉たまの輦くるまもおろかである、女一人に、あまりに冥みよう加がにすぎた迎えであると八雲は思った。闇を走りながら、瞼まぶたの熱くなるのを覚えた。

そのかわりには、自分が、妻となったあかつきには、この千倍も良人の為に尽そう！ この万倍も部下の兵たちを愛してやろう！

『わあつ……。わあつ……。』

八雲はもう鬨とぎの声の中だった。

弾丸たまが来る。——誰とかもわからぬ槍が突っかけて来る。腸を出した馬の腹が、横たわっていたり、旗差物の竿だけをつかんで

いる兵が、

『畜生つ、畜生ッ』

虫の息で、死骸の中を這はっていた。

『三郎様あッ……』

彼女の黒髪は、血なまぐさい闇を衝いて駆けまわった。

ぎ、ぎ、ぎ、ぎッ——と真つ黒な一群の騎馬きばむしや武者が、夕立のよ

うに此ちつ方へ向つて駆けってくる。北条勢に備えをくずされた前線の旗本らしかった。

『あれだ！』

八雲は、奔馬ほんばの群を待っていた。そして、先頭の華やかな武者

のあぶみへすが縋すがつて、

『三郎様ではございませんか』

『ちがう！』

武者は、弓で、彼女を払った。

卵うの花はな緘おどしの草摺ずりをゆりうごかして、  
わもの者がある。 憂かつ々と、退ひいて来た強つ

『もし！ 安中三郎様は、どこにおいて遊ばすか』

『知らぬ』

駒の尾が、彼女の顔を払って通った。

彼女は怯ひるまなかつた。続々と来る後続隊の将に又すがって、

『おたずね申します。あなた方は、もしや安中城の方々ではございませぬか』

『いや』

訊かれた部将は、かぶりを振るだけなのである。

『では、あまり急いで、陣をまちがえたか』

と、八雲は、戦場に捨てられてある駒をひろって、半里ばかり鞭むちを打つてとんだ。そこにも、累るい々たる死骸と、先の兵馬とは比較にならない意気を持った将卒が、八方へ敵を駈けちらして首をあげる毎ごとに、名乗り揚げ、勝かちどき鬨どきをあげして、しかも整々と陣形をすすめていた。

『——これこそ、上杉家の家人、安中三郎進様の御本陣』

彼女は疑いを容れなかった。

まっしぐらに、その本陣とも思える旗本の中へ馬を乗りいれて、

『八雲です！ お迎えをいただいた八雲でござります！ 三郎進様にお取次ぎくださいませ』

鞍をとび下りていうと、七、八名の旗本がどつと取り囲んで、

『東郷五郎左衛門の娘八雲どのか』

と、念を押した。

『はい、かねて、三郎進様から御密書をいただいた八雲に相違ございません』

答えるが早いか、

『天命だっ』

甲冑の旗本が、背中をどんと突いた。

鉄の桶でもぶつけられたように、八雲は前へよろめいた。左右



からも前から、途端に、物の具の固い腕が、彼女のな嫺よやかな腕くびをつかみあげて、

『ここは、北条方の里見義介が陣だ。よくも、八雲と、自分から名乗ってきたの』

『げッ……。では……。先に崩れて行つた騎馬武者たちは』

『あれも、安中三郎の兵ではない。常陸下ひたちしもずま妻の上杉方の一党で、安中城の危急を聞いて、援兵に馳せつけようという途中を、こつちで先に出鼻をくじいてやつたのだ』

『アア……。』

石に挫ひしがれた白い花のように、八雲は地に顔を横づけた儘、その両手を荒縄にまかせてしまふほかはなかつた。

## 黄母衣護送

馬蹄<sup>ひづめ</sup>や、具足をつけた草鞋<sup>わらじ</sup>が、ぱくぱくと埃を持ち上げる。真つ黄いろに空は汚れて、太陽が黒く見える。

大利根からうごきだした北条勢の一部が、灼<sup>や</sup>きつくような三伏の道を、蛇形<sup>だぎよう</sup>になって、安中城の方へいそいでいた。

『仆<sup>たお</sup>れる奴など捨てて行けつ。暑さで参るような人間が、物の役に立つかっ』

騎馬の将が、鞍から喚いてゆく。徒歩かちの足輕は、日射病でばたばた落伍する。歩いている者でも、熱病のような呼吸づかいである。どの顔も、眼ばかり光らし、汗を流している荒壁にひとしい。

『くそうツ！ 歩あゆベツ！』

牛車が十輛ばかり、荷駄にだが三十頭ほど、軍のいちばん後から続いて行つたが、牛と馬も、暴れたり反それたりするので、遙かに、遅れていた。

『牛方さん、お休みよ』

その一輛の軍梱こりのあいだに、萩乃は乗せてもらつて来た。足輕や、荷駄の者と、すっかり懇意になつたおかげである。

『甘いものでも食べてさ。体がたまるまいよ』

『ばか言こけつ、首が飛ぶわッ』

『氣の毒だなあ、戦いくさする男はよ』

『よう、女は見えておけ』

何どうしても動かない馬を、足軽たちが槍の柄でなぐりつけると、馬は氣が狂ちがつてしまつたらしく、田の中へ飛びこんで、ひとりどりで暴れ廻まつた。

『抛ほつてゆけ、抛ほつて行け』

それも捨てて進みに進む。

おとといの夜、利根の川向うに現われた軍馬は、安中勢でなかつたことを、萩乃は、翌朝この人たちに聞いて知つた。

あの戦の後、間もなく、この一部隊は、安中へ行くと本陣から

命をうけて出発したのである。萩乃は、ことによると主人の八雲はとうに安中城に入っているかも知れないと考えたので、急にこの軍旅へついて来る気になった。——然し、それも儚い<sup>はかなたの</sup>恃みのよくな気もする。

やがて、並木の口にかかると、

『おつ、うしろから黄母衣<sup>きほろ</sup>が来たぞつ、道を寄れ』

足軽頭が、槍をふつて呶鳴った。

黄母衣は使番の目印だ、急な使者は陣中でも駈けぬけをゆるされているし、列も横切る場合すらある。その黄母衣組の土<sup>さむらい</sup>が一騎に、ただの騎馬武者が五名ほど、一頭の裸馬を中に囲つて、黄塵<sup>こうじ</sup>の中から次々に姿をあらわし、驀<sup>ま</sup>っしぐらに、眼のまえをよ

こぎつて彼方かなたへ駈け去つた。

その一頭の裸馬の背には、ひとりの女性が、荒縄で縛りつけられていた。前後の武士は、相木熊楠の手の者だった。

『おう、女だ』

『おとといの夜、御本陣で捕まつた女じゃ』

一瞬だが、足軽たちは、女という声だけで、わいわいわいとはしやぎ合つた。萩乃も、それをチラと見た一人であつた。はツと  
思うと、全身の血がのぼつて、起ちかけた頭に、ぐらぐらと眩めまいが来てしまつた。

『やつ、餅売りが、牛車から落ちたぞ』

『病気が出たか』

『抛ってゆけ』

『いや、女は、かあいそうだ』

荷駄の小者が三、四人駈け戻って行って、埃の中から彼女をか  
つぎあげて来た。

——絶え間なく、牛車の轍わだちは廻って行く。

夜になると、行軍はずつと楽になった。菘乃は、人にかくれて、  
泣いてばかりいた。

翌る日の朝早く、安中の城下に人馬は着いた。そこでも菘乃は、  
真つ暗な絶望にぶつかつた。なぜならば、安中城の城壁のうえに  
見える旗差物はたさしものは、すべて、北条勢と、武田勢のものであつた。

甲相両軍の寄手よせてをうけて、半年近く、孤城をささえていた城将

の安中三郎進は、きのう暁あけがた火を放つて、父越前守が立て籠つて  
いる松井田城へ落ちのびて行つたといううわさであつた。

## 不落の城

夢でもみたのか、相木熊楠は、

『八雲っ』

と、大きな声で云つて、自分の声に驚いたように、がばつと、  
楯たてのうえに起き直つた。



青い月の光が、陣幕とぼりに射している。——真夜半まよなかは、具足のままでも肌寒い。

幕のすそへ、身をかがめて、魚住十介が片手をついた。

『お呼びでしたか』

『いや……呼びはせぬ』

『お声がしましたか』

『知らぬ』

『耳のせいですか』

十介が、立ち去ろうとすると、

『待て待て。何か俺が云つたか』

『戦いくさのお疲れでしょう。囁うわごと言のように——』

『な、なんと云った？』

『八雲と、仰つしやったようで』

熊楠は、苦りきつて、大きな男性的な唇を声なくうごかして  
いたが、

『そうか……いや、そうかも知れない。……折角せつかく、味方の里見

義介が捕えてくれたあの女を、吟味の都合上、俺の陣屋へ受け取  
つたはいいが、もしも亦また、逃げられでもしたらいい恥をかくと、  
それを常に気がかりにしているから、夢にまで、八雲が逃げた夢  
を見てしまった。はははははは』

『もう、二十日はつかあまり、仮屋かりやに寝かしてありますから、体もすつ  
かり癒なおつたはずです。今夜あたり曳ひき出して、お調べになつては

何うですな』

『まあ急ぐことはない』

と、かぶりを重く振って、

『——今日は俺も戦につかれています』

『それもそうで』

『ただ、逃がさぬ様に、逃がさぬように』

『十名ずつ、交かわる交るに、番を立たせてあります故、それはお案じなく』

十介が立ち去ると、彼は又、楯のうえに、具足の音をずしりとさせて、手枕をかつてまどろんだ。

ここは、妙義山を後に負って、碓氷川を前にした丘の陣地だつ

た。敵の安中越前守と三郎進の父子が立て籠おやくっている松井田の城は、川を距てて此処から指さすことのできる要害な地にあつた。

妙義、浅間、榛名はるなの三山のふところに囲まれているようなこの城の地の理には、武田勢も手をやいてしまったらしい。攻め口はわずかに、この河原と、安中から下しもごかん後閑の山道を経てかよう二口しかないのである。何万の兵馬を集めてみたところで無駄だつた。

武田勢は、箕輪城みのわじょうを抜くと、

(後は北条にまかせる)

と、云わないばかりに、抑えの軍馬だけを残して、あらかた凱が旋いせんしてしまった。相木熊楠は、この難攻不落な城の正面にあて

られて、甲州方の諸将からも、小田原の味方からも、今や、その器量を試されているような立場にあつた。

(落す! きつと落してみせる!)

彼の眉宇<sup>びう</sup>には、無言のうちに、その信念がほの見えるが、もう八月に入っている。やがてこの碓氷川に、秋風の立つのはすぐだ、秋風がふくかと思えば、赤城、榛名の頂きに雪を見るのも又すぐだ。

とこうする間に、謙信自身が、上杉勢の精鋭をすぐつて、三国越えから潮<sup>うしお</sup>のように、上毛の野に殺到したら何うなることか。

部下は、彼の顔を仰いで、

『すこし、瘦<sup>や</sup>せたぞ』

と、心配して咄はなき合あった。

たしかに、相木熊楠くまくすの頬には、痩せが見えてきた。——今、手枕をかって、楯の上に、うつらうつらと眠っているその顔を月明りに眺めても。

### 黒髪刺客

うかと、相木熊楠は、眠り落ちてしまったらしい。

轡くつわむし虫むしが、いい音で啼なきぬく。

陣幕とぼりのすそにたかっている 蟋きりぎりす 蟀きりぎりすの影までが、透すいてみえる程に月は冴えていた。

と——その虫の音が、はたとやんだ。幕の外へ、いつのまにか、小猫のように這い寄つて来て屈み込んでいる人影がある。

短い刃をうしろに秘かくして、陣幕とぼりのすきから寢息をのぞく——。

黒髪をうしろへ長く垂れた田舎娘の刺客しかくだった。

『熊楠ツ。——思い知つたかつ』

陣幕とぼりを刎はねあげて、躍りこむと、

『あつ、何するんだ』

と、そこに寝ていた町人がとび起て、彼女の腕をつかんだ。見ると、いつか古河の畑で別れたきりの外郎ういろうり売だった。

『や？ お前は、どうしてこんな所に』

『何のふしぎがあるものか。いつも薬を売りに来る御陣屋だもの』

『熊楠は、熊楠は』

『あぶねえ物を持つてるな。まあ離せ』

『お嬢様の御無念ばらし、刺しちがえて死ぬる気じゃ。おのれも、熊楠の手の者か』

『面倒くせえっ』

外郎売の男は、萩乃を組みふせて、声を出さないように、顔を  
ぬの布で縛った。そして、もう一重、ひとえ内側の陣幕を上げて、

『相木様』

『おう、憎ツくい奴だ、八雲の召使いだな』



『どういたしましょう』

『その成敗は、貴様にまかせる。——今夜のうちにだぞ』

『はっ、では——』

目礼して、外郎売の男は、萩乃の体を横抱きにすると、魔風のように、何処かへ立ち去った。

その頃から何処<sup>どこ</sup>となく、深夜の空気がさわがしかった。熊楠は、眼をかがやかせて、大地の音でもあるようなその気配を聞き澄ましていたが、愕<sup>がくぜん</sup>然と起つて、

『十介っ。魚住十介はおらんかっ』

十介は駈けて来て、槍と一緒に身を屈<sup>かが</sup>めた。

『なんだっ、あの遠い物声は』

『お味方です』

『味方？』

『されば、何者かが松井田の城を、相木勢にまかせておいては、百年経つても落ちるはずはないなどと申し触れる者があつて、その為、御本陣氏政公からの御命ぎよめいで、里見義介、そのほかの手勢が、下後閑しもごかんの間道から、急に、総攻めにかかったそうでございます』

『なに、この相木熊楠をさし措いて、総攻めにかかったと。ううむそうか……』

くちびるか唇を噛んで、凝じつと、考えこんでいたが、突然、

『陣鉦じんがね、陣鉦じんがねつ。総がかりの鼓を打てや。夜の白むまでに、松

井田の城は相木勢が乗り破った』

鎧を着こむと、

『十介、篝火かがりを焚たけつ、あるかぎりの篝火を焚けつ』

と、命じた。

十介は、それぞれの部将に、熊楠の命をつたえて駈けまわった。

霽へきれき 霽へきれきのように急なのである。陣屋の裏から荒駒が狂いだして、

まだ夜のふかい河原で嘶いなないた。

## 憎炎愛炎

松井田城の山絵図をひろげて、相木熊楠は秘策を描いた。そして、肚はきまつた。

鉄砲組、槍、弓、長太刀、それぞれの部将をあつめて、

『城を抜くか、斬り死にするか、この二つを、夜明けまでに決めるのだ。相木熊楠もきようかぎりの一命と思うてかかる。——祖先以来の君家の御恩に酬うはきようを措いてない。よいか』

云いふくめて、手配を授けた。

それが終るとすぐ、

『八雲を曳ひき出せ』

と十介に云った。十介は疑って、

『えっ、今ですか？』

『そうだ』

熊楠の肚がわからなかった。何で、一刻ときを争っているこの総がかりの間際まぎわになど曳き出せというのであろうかと。

『連れて来ました』

十介の声に、又、山絵図を繰ひろげて後ろ向になつていた相木熊楠は、ふり顧つて、

『うむ……』と、ふとく呻うめいた。

八雲は、二人の武士に、左右の手をうしろへ捻ひねり気味に取られて、烈々と燃える篝かがりび火の前にひきすえられているのである。窠やつれてこそいるが——素服こそ纏まとっているが、この二十日余りを、

仮屋の牢獄に投げこまれたまま陽の目も見ずにいたので、頬くれないの紅はやや青白く褪さめているが——生れながらの美質はすこしも變らない。——いや相木熊楠がその以前、師の礼をとつて、東郷家へ出入していた頃から見れば、さらに、清純な処女美おとめびは増しているようにすら彼には見える。

『八雲！ ……』

『………』

『八雲っ！ ……』

沈痛な恨みのひびきをこめた熊楠の声であつた。おそろしいよ  
うな眉の表情である。齒は唇のわななきを固く縛つていた。

『……相木熊楠の名をよもや忘れはしまいな。俺わしは、夢寐むびの間も

忘れていない。男が、この胸へ、生涯焼きしるされたものを……。それが何であるかは、やがて、思い知るがよい』

八雲は、きつと顔をふり上げた。その顔に、その眸に、赫々かつかくと赤い篝火が燃える。彼女の心をそこで焚たいているように。

『見さげ果てたお人ではある！　それが武士の心根ですか！　私にはあなたの心の裡うちなどわかりませぬ。ただ卑劣な武士よと、蔑さげすまれるだけのこと。もう、この期ごになって、何もいうことはない。ただ、そなたも人間なら、力の弱い女子が、この戦国のみだれた世の中で、女子の道のために戦うことのどんなに苦しいかぐらいは分るでしょう。一粒の涙でもあるならば、私を松井田城の下へ立たせてください。たった一言、私は自分の心を——女子の心根

を——あの孤城のうちにいる安中三郎進様に呼びかけて死にたいのです。遠くからでもよい、お互の姿を、一目見合つて、死にたいのです』

『よしっ!』

熊楠は全身をもつて大きくうなずいた。

『望みどおりにしてやる。自分の未来の妻が、城下の敵に——しかもこの相木熊楠に——斬りさいなまれるのを、三郎進に見せてやることは俺わしから望むところだ。十介、この女に縄を打てっ』

×

×

×

×

丑うしみつ満みつから明け方にかけての激戦だった、山が鳴り、谷が吠え、



碓氷川はさけぶ。

『今が最後』

と、城将の安中三郎進は、いちど、木戸をひらいて斬って出たが、その朝のすさまじい相木勢に斬りたてられて、城門のうちへひくと、八方を閉め切つて、矢弾丸やだまのあるかぎりを、寄手へ送つた。

『——卑怯、卑怯つ、城将の三郎進にものを言う。しばらく、鉄砲を置き、弓をひかえろ』

その時、城の空壕からぼりへ近々と駒をよせて、こう大音にどなっているものは、いうまでもなく相木熊楠である。

涙の強者つわもの

黒鹿毛くろかげの鞍くらつぼへ踏み跨またがった自分の胴脇へ、遠目にも派手やかな古代紫ふとひもの太紐ふとひもで、八雲のからだを確乎しっかとくくりつけていた。片手をさらに八雲の身にまわして、抱えるようにささえ、右の手に、軍扇をかたく振って、

『——三郎進どのはいかがせられたか。かねてのおん誓いを果さるる吉日、お支度はまだかっ』

すると、城の狭間はざまから、髪はげの白い一人の老武士が顔をだした。

見ると、物の具をすつかり解いて、あさがみしも麻袴に平服を着ているのである、白扇を振つて答えながら、

『初めてお目にかかる。それがし某は、三郎進の父、安中越前守長房でおざる。このたびのお取計らい、なんと申そうやらただ感涙にくれでござる。今こんぎょう暁、頂戴いたした密使のお言伝ことづてによつて、われ等父子おやこ、死すとも北条家には渡しがたきこの松井田城ではあれど、貴公の義心に、向くる矢もはや尽きた。三郎進の身は、仰せにまかせてござるが、この越前守は、はや老い先なき身、この城のしの熨斗がわりに添えてただ今進上申すであらう。見たまえや、老おい武者の最期を——』

『おお』

熊楠が、扇子を駒のたてがみへ下げた刹那せつなに、狭間に見えた安中越前守のすがたはもうそこになかった。そして、真つ赤な炎が、すべての狭間からいちどに噴きだしていたのである。

『落ちたつ、——城は落ちたぞ。里見、その他の味方に越されては、相木勢の恥辱ぞ、武士の名がすたるぞ、かかれ、乗れやつ』  
云うが早いか、抑 《そもそも》、どうした事なのであろう、相木熊楠は、そのまま鞭を駒にあてて、戦場から鷹たかのように何処かへ翔かけ去ってしまった。

後閑ごかんの間道から風戸峠へと、やがて、悍馬かんばは死にも狂いでのぼつてゆく。——一面の鏡のように、やがて遙かに榛名はるなの湖うみが見えてくると、

『おうついつ。……おうついつ……』

あらんかぎりの声をもつて、峰へ、谷へ、高原の彼方<sup>かなた</sup>へ、呼ばわっている。

すると、もう秋草の繚<sup>りょうらん</sup>乱な高原の彼方で、旗差物を打ち振るものがあつた。——二百人ほどの軍馬があつた。

その列から歩みだして、相木熊楠を迎えるもののように、肅然と立ちならんでいたのは、安中三郎進であり、又、先に小田原の城下へ密使として行つた乱波者の石田大七であり、又その側にいるのは萩乃であつた。

『待ちかねておぎつたらう』

<sup>こま</sup>駒を寄せると、熊楠は、紫の太紐を解いて、絶えず宥<sup>いたわ</sup>るもの

ように抱えていた八雲の体を、鞍つぼからそつと摺り下ろした。

『おうつ……』

三郎進と、八雲とは、手をとりあつて、秋草の中に埋まつた。すべてが、八雲にはまだ夢のようだった。見れば、自分を数尺離れて、きのう迄、彼も恨み、自分も憎んでやまなかつた相木熊楠が、両手をついて、顔もあげ得ずに——しかもこの荒々しい強者が、涙で顔をいっばいに汚して、その顔も上げ得ずにひれ伏しているではないか。

『……どうしたのでしょうか、これはいったい？』

八雲はうつつのようだった。うつろな眸が、この意外な人間の姿を、眼に見ても信じられないのであった。

『ごもつともです』

熊楠は、いつものような重い声でいう。

『すべてが、自分一存で為したこと、おわかりになりますまい。かような智謀ちぼうは、あなたのような清純なお人には、分らぬままがむしろよい。ただ、末ながく、お倅せであれ、よいお子をもうけて、八雲様は、恩師五郎左衛門先生へ、又、三郎進殿は、嚴父越前守どのへの御供養くようをあそばされい。——そして、この熊楠は、ただ欣ばしきでいっばいでござる、決して、誇言ではない、銜てらいでもない、欣うれしいのです、欣し涙が出てならないのでございまする』

## 女子道・武士道

『どうしてでしょう、私は知りたい。熊楠、何がそなたは欣しいのですか』

『男の為<sup>す</sup>ることを為<sup>なし</sup>し事が……』

『では、初めからそなたは、この八雲も、お父様をも、恨んではいなかったのですか』

『なんでお恨<sup>つかまつ</sup>み仕<sup>つかまつ</sup>るすじがありましたでしょうか——熊楠の今日あるも、恩師のお陰、一日とて、忘れ申したことはない。ただ、世上の詭<sup>き</sup>



弁者べんしやが、とやこうと、某それがしの心を測つたり、あなた様の身边に、  
危い風聞をしきりに沙汰いたします故、いわゆる、兵学の逆策  
をもつて、まず自分より先に、あなた様の敵に立つて、あなた様  
にかかる矢を、すべてこの身にうけて参つただけの事です。――  
例えば』

と、乱波者の石田大七に、眼をやつて、

『それにおける大七が、初めに、小田原の城下へ入りこまれた折も、  
すでに、奉行所の目付たちは、挙動をあやしと見ていたのでござ  
る。万一にも、大七の携たずさえてきた三郎進殿の密書が、余人の手に  
入ったら、八雲様は、即日しるしに殿より首級を召されよう。そう考え  
て、自分が捕えた。又、萩乃を召捕つたのも同じ考えであつたし、

八雲様の邸へ、捕手を向けたのも、この熊楠に相違ないのです』

『まだようわからぬ、それ程、この身を庇うてくれるおん身が、なぜ、捕手を使喚して、私を苦しめたのですか』

『その夜の事、お覚えはもうないか。——捕手のかかる少し前に、お邸の窓下を、編笠かぶって、それとなく謎ことばを、謡曲声にまぎらして、お告げして行つた侍のあつたことを』

『あつ……。ではあの編笠の人は、熊楠、おん身だったのでですか』

『又、萩乃には、出陣の混雑を、幸に、牢の前へ、わざと、短刀をすてておいた。——そして、かねて、自分の屋敷にかくしておいた石田大七を、巧みに貌容を化粧させ、外郎売に仕立て萩乃の身をまもらせたのも某の策。——その他、いちいち申

しあげぬ。すべての事は、きよしの夜明けに、大七から越前守御  
父子へ申し告げてやった……。そして、ここに自分の心の底をの  
べて、恩師の御息女におわびすることも能うた。本懐ほんかいです。で  
は、萩乃、忠義をつくせよ、この熊楠の御手伝いは一時、そちの  
奉公は末が長い。……たのむ』

云い終ると、もう駒の背に返って、

『御一同、おさらばです』

黙然と、うなだれていた安中三郎進は、

『暫くお待ちください』

と、前へ駆けまわって、口輪をつかんだが、涙ばかりがあふれ  
て、俯向うつむいていて何も云えなかった。

熊楠は、その心もちを察して、

『おわかれ申したい、お離し下さい』

『相木殿。……す、すまなかつた。拙者は、あなたに負けた！』

敗れたのだ！』

『恋は、戦いくさではないはずです。そんなお考えは持たぬがよい。某それがしの気持が徒勞とらうになる。——又、そこもとの嚴父げんぷ、越前守殿の死もむだになる』

『やつ？ 父は、討死しましたか？』

『それも、お愁いたみあるな。お父上も、必ず御満足であつたと思う』

『ああ、八雲つ。二人はどうしたらよいのか』

『三国峠に道がある。あの山の背をこえれば、おん身が祖先の国』

土だ。その国土を踏めば、八雲様も、そこもとも、自ら御決心が成るものだ』

『そうだ、女は女の道に、侍は侍に成りきることだ。熊楠どの。又会おう！ 戦場で』

『来年は、信濃か、上野か』

と、熊楠は、十方の山脈をふと見わたして、ひとしづく 一滴、侍の道のさびしさを、大きな欣よろこびの後の睫毛まつげにたたえた。

霧まじりの冷たい風が、もう、越後境の山々から、しやうしやう 瀟々々と秋よろいを鎧よろいの袖に告げてきた。

(昭和十年八月)



# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「キング」大日本雄辯會講談社

1935（昭和10）年8月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

2015年1月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 篝火の女

吉川英治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>